

防衛問題セミナー議事録

- 1 日 時：平成24年1月26日（木）18：00～20：15
- 2 場 所：青森県青森市「青森市民ホール」
- 3 講師等：航空自衛隊北部航空音楽隊
陸上自衛隊東北方面総監部 政策補佐官 須藤 彰
陸上自衛隊第9師団 副師団長 陸将補 成田 千春
- 4 要 旨：次のとおり

【 開会の辞 】

（司会）

定刻になりましたので、ただ今から、防衛問題セミナーを開催させていただきます。

本日は、お忙しい中、そして雪降る中、東北防衛局主催の「防衛問題セミナー 東日本大震災 音と人の力」に、ご出席していただきまして、誠にありがとうございます。

私は、本日の司会を務めます東北防衛局地方調整課の大垣と申します。どうぞ、よろしく願いいたします。

皆様方にはご入場の際に、資料を配布させていただいております。その中に「式次第」が入っております。これに従いまして、本セミナーを進めてまいりますので、よろしくお願い致します。なお、裏に注意事項等が書いてありますので、一読していただきまして、最後までお付き合いのほどよろしくお願い致します。

また、アンケート用紙が資料の中に入っております。改めて、ご案内いたしますが、この用紙に後ほどご記入願います。アンケート用紙につきましては、セミナー終了後に回収をさせていただきたいと考えておりますので、皆様方のご協力方よろしくお願い致します。

なお、本日の第2部の説明内容及び質疑応答の内容につきましては、当局のホームページ等に掲載し、公表することを予定しておりますのでご了承願います。

それでは、本日のセミナーの開催にあたりまして、主催者であります東北防衛局長・増田義一から挨拶させていただきます。

【 主催者挨拶 】

(局長)

皆さん、こんばんは。ただ今、ご紹介いただきました東北防衛局長の増田でございます。主催者を代表いたしまして、一言ご挨拶させていただきます。まずは、皆さん、本日は大変お忙しい中、また、大変な積雪の中、おいでいただきまして、誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。また、本セミナー開催にあたりましては、多方面からご協力をいただいております。青森県並びに青森市、青森商工会議所、青森観光コンベンション協会、河北新報社、陸奥新報社、東奥日報社、デーリー東北新聞社、エフエム青森でございます。心より御礼申し上げます。

さて、本防衛問題セミナーは、東北の多くの方々に防衛問題、或いは安全保障問題につきまして、ご理解をいただくということを目的に開催してございまして、東北の各地で開催しております。前回は、11月にむつ市で開催いたしまして、今回はそれに引き続きまして、また青森県で開催させていただくことになりました。本日のテーマは、東日本大震災でございます。東日本大震災では、大変多くの方が亡くなられて、また現在も行方不明の方々がたくさんいらっしゃいます。亡くなられた方々のご冥福を改めてお祈りする次第であります。

本日は、第1部と第2部の2部構成になっておりまして、第1部が演奏会、第2部が講演会となっております。第1部の演奏会では、航空自衛隊北部航空方面隊の北部航空音楽隊に演奏していただきます。演奏の中には、今回の震災で被災地を回って慰問演奏をしてもらいましたが、その時に演奏した音楽も演奏する予定であります。また、第2部の講演会では、お二方の講師の方をお願いしておりまして、1人目は、東北方面総監部の須藤政策補佐官をお願いしております。須藤政策補佐官は、震災の後に被災地各地を回られて、直接それに接して、毎日防衛大臣に日誌という形で報告書を送っておられました。その報告書を基に著書を発刊されておりまして、「東日本大震災自衛隊救援活動日誌」という著書の著者でもあります。2人目の講師は、地元青森県の第9師団副師団長・成田陸将補をお願いしております。成田陸将補は、震災間もない昨年4月にこちらに赴任されまして、第9師団は救援活動、復旧活動の中心的な役割を果たしたわけですが、その副師団長として活躍をされました。こうしたお二方でございますので、今日はおそらくあるいは聞けないような貴重なお話が聞けるのではないかと期待しているところでございます。

最後になりますけれども、今後とも防衛に是非ご理解いただきまして、私どもにご支援ご鞭撻等々をいただければ幸いと存じます。それをお願いいたしまして、私の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

(司会)

続きまして、本日の開催地であります青森県の副知事・佐々木郁夫様からご挨拶を賜りたいと思います。

【 来賓挨拶 】

(佐々木副知事)

皆様、おばんでございます。県副知事の佐々木でございます。三村知事は、本日公務で上京中でございますので、私が代わりましてセミナー開催にあたってのお祝いとご挨拶をさせていただきます。

まずもって、本日の防衛問題セミナーの開催をお喜び申し上げますと共に、増田局長さんを始め東北防衛局の皆様には、日頃から本県行政に多大なご協力をいただいていることに厚く御礼申し上げます。

また、自衛隊の皆様には、日頃から国土防衛、そして国際平和協力活動など崇高なる職務に精励されますと共に、災害時におけます救援活動など多大なご協力を賜っておりますことに心から感謝申し上げます。特に、昨年の中東大震災におきましては、地震の発生直後から県内各基地から県の災害対策本部へ人員を派遣していただきました。そして、自衛隊航空機によります上空からの偵察、支援物資の輸送、そして被災地での炊き出し、瓦礫の撤去など県内における災害対応のみならず、甚大な被害に見舞われました県外地域での長期にわたる災害救援活動にも、迅速かつ誠実に取り組んでいただきました。これらの活動の様子は、私も年末の特別番組ですか、テレビで県内のある民放テレビ局が特集して放映されておりました番組を拝見いたしまして、非常に感動したところでございます。特に地震の発生直後、発生時期は大変まだまだ寒い時期でございましたが、そういった中で温かい食べ物を提供されている炊き出しのご様子、避難された方々が大変喜んで提供を受けておるわけですが、そうした中でその業務が終わった後で自衛隊の皆様自らの食事は、予め用意してある冷たい缶詰、そういった携行品、そういったもので食事をとられていると、黙々ととられているご様子が放映されていまして、非常にそういった強い責任感、使命感に深く感銘を受けたのを未だに覚えてございます。改めて心から敬意を表すると共に、改めて感謝を申し上げたいというふうに思います。

さて、本日のセミナーは、先ほど増田局長さんからご紹介がございました、第1部の航空自衛隊北部航空音楽隊の皆様によります素晴らしい演奏会に続きまして、第2部では、まさに東日本大震災におきます自衛隊の活動状況について、ご講演をいただけると伺ってございます。被災地でも実際に起こった貴重なお話などをお聞かせいただけるものと思います。

いずれにしましても、本セミナー、県民の皆様にとりまして、我が国の防衛問題、そ

して自衛隊の日頃の活動につきまして考える上で、大変良い機会となりますようご期待を申し上げるところでございます。

結びといたしまして、東北防衛局を始め関係者の皆様の今後ますますのご活躍と、本日もご参会の皆様方のご健勝、ご多幸をお祈りし、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

本日は、本当にありがとうございます。

(司会)

ありがとうございました。ここで祝電を頂戴していますので、ご披露させていただきます。

衆議院議員・大島理森様、同じく中野渡詔子様、同じく江渡聡徳様、同じく田名部匡代様、参議院議員・山崎力様より、祝電をいただいておりますので、ここで紹介をさせていただきます。

【 第1部「演奏会」 】

(司会)

それでは、第1部の航空自衛隊北部航空音楽隊による演奏会を開催いたします。

北部航空音楽隊は、航空自衛隊三沢基地に所在し、北海道及び青森県、秋田県、岩手県の東北3県を担当し、地域を代表する吹奏楽団として皆様に親しまれております。

東日本大震災後には、被災地で精力的に慰問演奏活動を行い、被災者の皆さんを励ましてまいりました。本日は、被災地慰問の際に演奏しました元気の出る音楽をお願いしております。どうぞお楽しみいただけたらと思います。

それでは、音楽隊の皆さん、よろしくお祈りします。

(航空自衛隊北部航空音楽隊による演奏)

(司会)

どうも、ありがとうございました。ここで、19時00分まで休憩を入れさせていただきます。

このホール入り口前の受付横に、東日本大震災の自衛隊及び米軍の活動写真、並びに防衛白書のダイジェスト版を掲示させていただいておりますので、時間のある方は、ご覧下さい。それでは、休憩とさせていただきます。

【 第2部「講演会」 】

(司会)

それでは、第2部の講演会を開催させていただきます。

第2部の説明者について、ご紹介させていただきます。

本日、最初の演題であります「東日本大震災における自衛隊の活動・任務」について、ご説明いたします、陸上自衛隊東北方面総監部政策補佐官・須藤 彰です。

須藤政策補佐官は、平成10年に防衛庁に入庁後、防衛庁経理局、防衛局、ケンブリッジ大学大学院留学、政策研究大学院、官房秘書課部員等の役職を歴任され、平成21年1月に運用企画局部員、平成22年10月に現在の役職に就かれております。

続きまして、「東日本大震災対処の概要」について、ご説明いたします、陸上自衛隊第9師団副師団長・成田千春陸将補です。

成田将補は、昭和56年に陸上自衛隊に入隊後、米国防衛駐在官、内閣官房参事官、北部方面総監部調査部長等の役職を歴任し、平成22年3月に北部方面総監部情報部長、平成23年4月に現在の役職に就かれております。

それでは、早速、演題に入らせていただきます。須藤政策補佐官、よろしく申し上げます。

【 その1 「東日本大震災における自衛隊の活動・任務」 】

(須藤政策補佐官)

皆さん、こんばんは。本日は、お忙しい中、お集まりいただき、ありがとうございます。今ご紹介に与かりました、私、仙台にあります東北方面総監部で政策補佐官をしております、須藤 彰と申します。

今日は、自衛隊の活動について、ご報告をさせていただきます。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。私は平成10年に防衛省に入っております。この格好(迷彩服)をしておりますが、私は役人です。防衛省のことに詳しい方は、防衛省の中には制服組と背広組の2つがあるとか、また、この両者は実は仲が悪いのではないかなどと、お聞きになったことがあると思うのですが、その分類でいきますと、私は背広組ということになります。ただ、この格好をして、「背広組の須藤です。」と言っても、ご冗談でしょうというふうに言われてしまいます。震災以来、ずっとこの格好でおりますので、形の上でも分類が難しくなっていますし、気持ちの上でも、自分は事務官であるとか自衛官であるとか、そういうことを考えずに、仕事をしています。

私は政策補佐官というポストに就いており、平素は自治体など関係機関との連絡調整を行っています。今回の震災では、米軍や関係自治体、関係省庁などを相手に、仙台に置かれた司令部で勤務しながら、調整にあたっております。

また、今回の震災では、後ほど紹介しますが、統合任務部隊というものができました。

統合任務部隊は、10万人という非常に大きい態勢で動いておりましたので、指揮官の所へすぐには情報が入ってこない。暫く時間が経過すると、部隊の方から、正確なしっかりした情報が入ってきますが、やはりすぐには情報が入ってきません。そこで普段の仕事に加えて、指揮官にタイムリーな情報を提供するために、ほぼ毎日被災地を回りまして、部隊がどういう活動をしているのか、被災者の皆さんがどのような苦しい思いをされているのか、そういう現場の実情を確認した上で、「この点はこういうふうにした方が良いんじゃないでしょうか」とか、「この問題では、部隊はこういうふうに動いた方が良いでしょう」というような助言をしておりました。

それでは、これから資料を使いまして、説明していきます。

今回ですが、繰り返しになりますが、10万人体制ということで、ちょうど画面の表のように、防衛大臣の下にJTF東北、これはジョイントタスクフォース（Joint Task Force）東北、つまり統合任務部隊が組織されました。ご存知のように、自衛隊は、普段は陸、海、空と分かれて運用されていますが、今回は1つの統合任務部隊として、一体となって動くことになりました。

その指揮官が、当時の東北方面総監だった君塚陸将です。10万人の指揮官として、陸、海、空、それぞれの部隊を指揮しておりました。私がいましたのは、この司令部の中です。先ほども説明したように、ここで指揮官に、現場で確認した情報を提供したり、助言をしたりしていました。陸上自衛隊は、一番多い時で大体7万人の数で活動しておりました。海上自衛隊は約1.4万人、航空自衛隊は2.2万人、合計すると、大体10万6千人。この体制で自衛隊は活動しておりました。

あと、これは日本側の指揮下にはないのですが、今回、米軍が我々自衛隊を支援してくれまして、一番多い時で2.4万人の態勢で、被災者の支援にあたってくれました。

次の資料をお願いします。今度は、司令部の中ですが、ちょうど赤く塗ってありますこの政策補佐官、これが私になります。他には総務部、人事部、情報部、防衛部、装備部という部があるのですが、これらの中の1つに政策補佐官があります。ほかに、もう1つ赤く塗ってありますが、こちらは法務官です。今日は来ていないのですが、法務官の近藤1佐とペアで現地を回りまして、被災地の状況、部隊が困っていることはないかなどということ、いろいろ聞いて回って、指揮官に報告をしておりました。

次の資料をお願いします。まず、震災の特性です。今回は、地震よりも津波の被害が非常に大きかったことです。ヘリコプターで上空から下を見ますと、もう海の中に街ができていくかのような感じです。津波で家がずっと流されているからなのですが、あたかも街が海の中にできていくかぐらいの大きな被害が出ておりました。

それから津波と原発。これはもう皆さんご存じだと思いますが、津波だけではなくて、原発による被害もありました。自衛隊的に言えば「二正面作戦」ということになります。

更に、地方自治体の中には機能を喪失しているような自治体もありました。報道など

で、津波で役場が流されてしまった自治体、町長さんが亡くなられた自治体があり、そういう自治体はうまく仕事ができないのではないかと報道もされていましたので、そういうイメージを持たれている方も多いかと思います。しかしながら、これは政策補佐官の仕事になりますが、実際に調整にあたってみると、そういう自治体というのは逆に動きが非常に良いのです。

それでは、どういう自治体が良くないかといいますと、あまり被害が無かった自治体です。つまり、震災の時にも、平素の仕事のやり方をそのままやろうとしてしまうため、かえって仕事がうまく進まない状況になるのです。例えば、避難所に津波で押し上げられたヘドロがたくさん溜まっている場合。放置しておく衛生上問題となりますので、これを片付けないといけません。自衛隊はバキュームカーを持っていないので、自治体の方になんとか片付けてくれないかをお願いします。そうすると、自治体の中で喧嘩が起きます。これは衛生上の問題だから、衛生部局が対応しないとダメ。いやいや、ヘドロは産業廃棄物にあたるので、この担当は環境部局でしょう。そうかと思うと、そのヘドロがあるのは避難所に指定された学校だから、これは教育部局が担当するのが筋だ。何を言っているのですか、これは災害が原因でヘドロが溜まったのだから防災部局の仕事ではないですか、とお互いに主張しあって、話が先に進みません。

それから瓦礫の捨て場ですが、瓦礫置き場も各部ごとに縦割りで決まっているのです。よく瓦礫の捨て場所がない、置き場所がないという報道がありましたが、実際、現地へ行きますと、結構置き場はあるのです。ただ、そこに自衛隊とか他の人が置こうとすると、「いやいや、これは環境部の瓦礫置き場です。他の人は使っちゃいけないのです。」というふうな話になっている。それでは、たとえば道路部の瓦礫置き場はどうかというと、道路上の瓦礫を集める所ですから量も多くて、確かに瓦礫で一杯になっています。片方では瓦礫置き場が余っているものの、片方では一杯になっているというような形で、なかなかうまくいかない状況がありました。

これまでは組織の中の縦割りの話でしたが、自治体職員個々の習性も問題になります。私も同じ役人ですので、これは自分も反省しなければいけないと思いますが、具体的には、救援物資の配分です。震災直後から、被災地には全国各地から多くの救援物資を送っていただきました。これらの救援物資は県から市町村の集積場へと運び込まれて、そこから被災者の元へ配送されることとなります。ところが、その救援物資が避難所になかなか回らないのです。震災直後は物資自体が不足していましたが、その後、自治体の集積場へ救援物資が集まるようになって、避難所になかなか回らないのです。当初は携帯電話も繋がらず、なかなか情報が入って来ませんので、自衛隊の方でも人を出して、どの避難所には何人くらいいるかということを探るのですが、なかなか正確な情報は入ってきません。実際、当初の段階では、どんどん避難される方もおられますし、逆に、自分の家がどうなったか確認されるために避難所を出ていく方などもおられて、な

なかなか正確な数字が分からない。「だいたい」しか分からないわけです。それでも、100人くらいじゃないでしょうかとか、200人くらいじゃないでしょうかという形で自衛隊が報告をして、「だいたい100人くらいですので、食事だったら300食くらいを持って行きます。」と自治体の方に掛け合うわけです。ところが、自治体の方は「いやいや、だいたい100人くらいでは困ります。98人なのか、102人なのか、そこをはっきりしてくれないと困ります。」と言われてしまいます。自治体としては、いただいた救援物資が余ったり、あるいは足りない、ということがあったら申し訳が立たないというのです。先ほども申しましたように、救援物資の宛先は市町村になりますから、自衛隊の一存では勝手に配れません。配りたくても配れなくなってしまいます。「非常時に、律儀にそんなことを言っていたら、話が先に進みません。助かる命も助かりませんよ」と説得しても聞く耳をもちません。我々の感覚では、足りなかったらもう1回届けばいいし、余れば次の機会に食べてもらえばいいじゃないかと思うのですが、普段、特に役所で予算の作業をやっていると、これは税金ですから、1円たりとも無駄に使ってはいけない、しっかりミスなく執行していかないといけない、とにかく間違っはいけない、という習性があるものですから、その発想で救援物資も配ろうとして、結果的に、上手く物事が進まないわけです。とにかく早く配らないといけないのに、なかなか配れないし、配らせてもらえないということで、残念なことに、食べ物などはそのまま倉庫の中で腐ってしまったこともありました。

次に、本対処の特徴ですが、ちょっと力んだ表現ですが、自衛隊が「最後の砦」だという思いで取り組んでいました。例えば、市町村であれば、上手く対応できない、もう駄目だと思えば、県の方へなんとかしてくださいと協力をお願いすることができる。県の場合も、これは駄目だと思えば、国に協力をお願いすることができるわけです。また、国の各機関もどうしても困ったときには自衛隊にお願いすることができます。ところが、自衛隊は他にお願いするところがありません。我々ができないということは、日本として、国として対応できないということになってしまいます。したがって、とにかく我々が「最後の砦」だという強い思いを持って、被災者のために、自衛隊の存在意義をかけて、災害に臨みました。

次の資料をお願いします。今度は実績です。

人命救助ですが、3月11日から26日までの間、ピークは13日になりますが、合計で1万9千3百人の方を救助しております。

ご遺体の収容になりますが、これは9千5百5人を収容しております。ご遺体全体では、だいたい6割を自衛隊の方で収容しております。

医療支援では、自衛隊の医官が被災地へまいりまして、診察をしております。風邪や持病の高血圧、ちょうど3月、4月頃でしたので、花粉症などの治療をしております。

ここでグラフをご覧ください。後でもう1回説明いたしますが、人命救助のピークは

13日です。それで、ご遺体の収容もやはり初期の頃が一番多いです。医療支援になりますと、ちょっと時間が経って、暫くしてからピークを迎えるという形になっております。

次の資料をお願いします。引き続き数字ですが、生活支援の実績です。給水支援ということで、合計3万3千トンの水を被災者の方に提供しております。それから、給食支援では、数が非常に多くなりますが、5百万5千食を被災者の方に提供しております。入浴につきましては、109万人に対して支援をしております。

グラフをご覧ください。震災の当初は、給水支援はそんなに多くないのですが、だいたい10日くらいしてからピークを迎える形となっています。給食支援も同じく、だいたい10日くらいしてからピークを迎えています。入浴支援も同じです。やはり最初は少なく、だんだん数が増えてピークを迎えます。

これはいったいなぜかと申しますと、もちろん支援の準備に相応の時間が必要ということもあるのですが、それ以上に、災害時の部隊運用の基本として、やはり初動では人命救助に集中する必要があるからです。よく人命救助は最初の72時間が大切と言われますが、これらの数字をご覧になるとよくお分かりになると思います。

報道などで、避難所によっては1日1個しかおにぎりがなくて、本当にひもじい、大変だ、自衛隊はいったい何をやっているのか、等々の話がありましたが、我々もそういう状況は把握していました。避難所に物が無いことは充分知っています。ただ、どちらを優先するかといえば、これはやはり人命救助の方になるわけです。お腹が減っている、確かにご不満があるのは分かる。しかしながら、現に、文句さえ言えず、不満さえも言えずに、瓦礫の下で声も上げられずにいる方がいることを考えますと、非常に苦しい決断ではありましたが、やはり人命救助を優先せざるを得ません。最初は人命救助にあたり、その後、だいたい1週間くらいしてから生活支援の方に主力を投入するという形で部隊を運用しておりました。

次の資料をお願いします。写真になります。

行方不明者の捜索状況です。当初は道路もその脇も瓦礫で埋もれてしまっていました。最終的にはこういう形で瓦礫を全て片付けております。我々の任務は、あくまで行方不明者の捜索で、瓦礫を片付けることが目的ではありません。ただ、行方不明者の捜索活動では、そこに誰もいないことを確認しながら、1箇所、2箇所と瓦礫を片隅に寄せていくのですが、そうしますと、お子さんなどの行方が分からないご家族の方は、ひよっとしたらあの下にいるんじゃないか、自分の子供とかがいるんじゃないかなどと、どうしても気になってしまうのです。我々は全部確認した上で、瓦礫を片隅に寄せているのですが、ご家族の方は気になられて夜も寝られない、気持ちがどうしても納得できないわけです。したがって、司令部としては、各部隊に捜索活動を命じるだけで、瓦礫についてはどこまで片づけなさいということは指示をしていないのですが、現場にい

ますと、そのようなご家族の強い気持ちが痛いほどよく分かりますので、そこは活動に当たる各部隊の判断で、「行方不明者の搜索」の内容を広く考えて、なるべく瓦礫を残さないように搜索をしていました。

これは、報道でも度々取り上げられています大川小学校です。児童108人のうち、7割の児童が亡くなられ、あるいは行方不明になりました。このように、最初、学校の中は瓦礫で埋もれています。押し波で学校の物が全て流されて、引き波で色んな物が入って来ています。タイヤとかウィスキーの瓶などの瓦礫で一杯でした。学校の中は機械を使って片付けるわけにはいきませんので、全て手作業で瓦礫を取り出し、最終的には何も無い状態にしております。やはりこちらにも、親御さんが、瓦礫が少しでも残っていると、頭ではそこには自分の子供はいないと分かるものの、気持ちがどうしても落ち着かなくなってしまうということで、このように瓦礫も片付けております。

次の資料をお願いします。こちらは、原発の20キロ圏内での行方不明者の搜索活動になります。側溝の中に潜り込んで何をしているのだろう？と思う方もいらっしゃると思いますが、小さいお子さんがこういうところに流されていることもありますので、このようにあらゆる隙間に潜り込みまして、隅々まで漏れなく搜索をしております。また、原発の20キロ圏内が他とは違うところは、被災者の方はこの中に入れないということです。他の場所ですと、津波が来た場所であっても、自分の家がどのようになっているか、自分の目で確認することができるわけです。ところが、原発の20キロ圏内になりますと、立入りが制限されていますので、自衛隊や警察などしか入れません。なので、皆さん自分の家がどうなっているか大変心配をされていました。したがって、この地域を担当した部隊では、皆さんのお気持ちを十分に汲んで、他の場所と同じように瓦礫を片付けながら徹底的に搜索を行うとともに、家の状況が分かるように写真を撮って、あなたのお家はこのようななっていましたと説明するようにしていました。確かに被害を受けていますので、綺麗で元通りというわけにはいかないのですが、写真を渡しながら報告しますと、被災者の方は、自分の家の状況を確認することができてよかったとおっしゃってくれたそうです。

次の資料をお願いします。こちらは、生活支援の一環で、現地のニーズの聞き取りです。我々は御用聞きと言っておりましたが、被災者の方に声を掛けて、とにかく困っていることはないか、いろいろお話を聞いていきます。最初は食べ物、水、毛布とニーズはシンプルです。しかし、段々時間が経って来ますと、毎日同じものを食べていると、どうしても飽きてきますし、栄養状態も良くありませんので、野菜が食べたいとか、暖かいものが食べたいとニーズが多様化してきます。衣類でも、単に寒さを凌げばいいというレベルから、もう少しお洒落な服を着たいというニーズも出てきます。また、さらに時間が経ちますと、自分の将来のこと、仕事は続けられるのか、自分の家をもう1回建て直して同じ場所に住むことができるだろうか、そのような点も気になってきます。

また、避難所生活も長くなりますから、いろんなご不満や悩み。例えば、誰々さんの軒がうるさいというのもあります。もちろん自衛隊として、相談を受けても、解決できないこともたくさんありますが、皆さんからお話を聞きまして、我々でできることは対応するようにしました。仮に解決できない問題でも、少なくとも誰かに話をしたことでスッキリしたという方も結構いらっしゃいましたので、我々としては、とにかく皆さんのお話をしっかり聞くことを心懸けて活動しておりました。

あと、この写真のように、女性の被災者に女性隊員が対応していますが、今回の活動を通じまして、男性隊員よりも女性隊員の方が上手に対応できる仕事があるなど感じたところですが、この御用聞きなどもまさにそうだと思います。例えば、化粧品がほしいと言われても、我々男性ではよく分かりません。また、いろんな人生相談にしても、いかつい男性の隊員が相手ではなかなか話しにくいと思います。やはり女性の隊員の方が話をしやすいのでしょうね。女性ならではの仕事、女性の方が男性よりもうまくできる仕事が、今回の震災では実際にあったと考えています。

次の資料をお願いします。同じく生活支援です。これは入浴支援です。こういう形でテントを張り、その中に浴槽を用意して、皆さんにお風呂に入っていただきます。被災者の方からお話をお聞きすると、普段と同じ事をした時に、普段と違う場合、例えば、普段毎日入っていた風呂が、あまりにもみすぼらしいとか、あまりにも不便だということになると、非常に惨めな気持ちになられるとのことでした。そこで、各部隊でそれぞれ考えまして、単にお風呂に入っただけではなく、たとえば、社交の場を設けて、お風呂上がりに皆さんでお話をしていただいたり、お化粧する場所を用意したり、創意工夫をしています。

次の資料をお願いします。こちらは米軍の活動になります。これは仙台空港での作業しているところです。当初、仙台空港も瓦礫の山でした。仙台空港が使えないと、山形空港や花巻空港など、救援物資を迂回して送らないといけません。仙台の地域に運ぶことができないので、米軍にいち早く片付けをしてもらって、物資を運べるような態勢にしました。その他、学校の復旧などいろいろやってもらいました。

今反省しているのは、もっと早く、米軍にいろいろとお願いをしておけばよかったということです。実は当初、米軍がどういう事してくれるのか、よく分かりませんでした。どのような機材を持っているかよく分からないし、それ以上に、米軍がどういう気持ちで日本に来てくれているのかが分かりませんでした。写真にありますような学校の清掃は、地域にとっては非常に重要な作業ですが、要は手作業ですので、人数さえそろえば片付けられます。野球でも、4番バッターにバントをさせていいのかどうかというふうな話と同じで、米軍じゃなくても、自衛隊じゃなくても、人数がそろえば誰でも片付けられる作業を米軍にお願いしていいのかなと悩んでいました。そこで、最初に仙台空港の復旧をお願いしたわけです。ここは被災地に物資を輸送する際の要となりますし、

復旧には多くの重機とマンパワーも必要になります。これは米軍にふさわしい仕事だろうと考えました。

そのうち、米軍と毎日話をしていくと、彼らからヒシヒシと熱いものを感じるわけです。俺達とはとにかく日本を助けるために来たのだから、どんな仕事でも、どんな事でもいいからやると言ってくれました。最初の表でも説明しましたが、我々は統合任務部隊、ジョイントタスクフォース (Joint Task Force) なのですが、米軍は統合支援部隊、ジョイントサポートフォース (Joint Support Force) なんです。名は体を表す」を地でいっているわけです。そして、そのサポートは何かといえば、それは自衛隊を助けること、自衛隊を支えることだから、とにかく自衛隊がやっていてどうしても手が回らないこと、困っていること、そういうようなことは、どんなことでも、何でもやるからと言ってくれました。お互いに強い信頼関係ができてからは、もう遠慮なく、学校の復旧などいろいろなことをお願いしました。

報道ではなかなか出てこないのですが、ちょうど3月の終わり頃で、学校が新年度を迎える時期です。学校もこのまま再開できるかと悩んでいる時でしたが、米軍が速やかに片付けてくれたお陰で、だいたいの学校が4月中には新学期を始めることができ、地元では大変好意を持って、米軍の活動を評価していただきました。

また、写真のように救援物資の輸送も米軍にお願いしました。この関係で、1つ困った事がありました。「この物資を、どこそこの場所に、何時に運んで下さい。」とお願いをするのですが、毎回、必ず時間と場所を間違えるのです。最初は、自分の英語が下手なのかなと思っていろいろ反省したのですが、紙に書いてメモを渡してお願いしても、それでも間違える。「いったい米軍はどうなっているんだ」と、米軍の担当に文句を言ったことがあります。そうしたら、「ミスター須藤、おまえは分かっていない。まだ青い」と。「自分たちはいろいろな国に行って、数多くの生活支援をやっている」。最近ですと、インドネシアのアチェというところ。それで「よく考えてみろよ。決められた時間と場所に物を置くと誰が勝つんだ？若い男に決まっているじゃないか。だから俺たちはわざわざ時間と場所を外している。そうすれば、予定の地点で待っている若い男を出し抜いて、女性や子どもにだって、物をもらえるチャンスが生まれるじゃないか。」と言うわけです。なるほど、そういう考え方をするのか、と感心しました。ただ、皆さんもよくご存知のように、日本人はそういうことはしません。そういう人たちじゃないんです。ただ、それを言葉で説明するとなかなか難しい。そこで、ちょうど、私のいます仙台の東北方面総監部の前にある小学校も避難所になっていましたから、百聞は一見にしかずと考えて、とにかく来て欲しいと米軍の担当をそこへ連れて行きました。タイミングがいいことに、ちょうど食べ物を配っているところで、皆さん一列にしっかり並んでいます。若い男の人も、お年寄りも子どももです。誰も割り込まず、ましてや力づくで奪ったりなんかするわけもない。しかも、その日は特別に子どもにだけ、「おまけ」

でチョコレートを食べることになっていまして、子どもたちがチョコレートをもって喜んで食べている。その光景を見まして、米軍の担当も「信じられない。これはもうタイタニックの世界だな」と、非常に感心してくれました。こんなことは、日本にいれば、当たり前光景ですが、そのときは私も同じ日本人として本当に嬉しかったですね。米軍もよく日本人のことを理解したようで、それ以降はこちらがお願いすると、ちゃんと決められた時間、決められた場所にしっかり物を届けてくれるようになりました。

私は、困った時とか辛い時、こういう時に人間の真価というか、その人の価値みたいなものが出てくるのだと思います。米軍は、我々が困った時に、とにかく何でもやる、どんな作業でもやるからと言ってくれました。俗な言い方ですが、本当にいい奴だなと思いました。また、逆に米軍の方も、こういう時でも、日本人は取り乱すことなく、このように秩序だって行動していることを分かってくれたと思います。「いろいろな国を支援してきたけれども、日本ほどレベルの高い国はない」と非常に感心してくれました。私も日本人としてとても鼻が高かったです。

次の資料をお願いします。こちらは戦力回復です。我々の活動も長くなりました。自衛隊も厳しい訓練を積んでいるとはいえ、やはり気合いだけでは乗り切ることはできませんので、隊員を休養させることにしました。被災者を支援する隊員は元気でなければいけませんから、理屈の上では、休養を十分にとって、栄養のあるものをたくさん食べる必要があります。しかし、被災地にひとたび足を運べば、本当に困っている被災者の姿を目の当たりにするわけです。そうすると、隊員は、自分たちは缶詰でいいから、温かいもの、栄養のあるものは、少しでも多く被災者の皆さんに食べて欲しいと思うのです。お風呂も、自分たちはいいから、被災者の人たちに入ってほしい。この気持ちは私も痛いほどよく分かりました。ただ、毎食缶詰で、お風呂に入らず、夜はずっとテントの中で生活していれば、どうしても身体に負担がかかってしまいます。隊員が倒れてしまっただけでは元も子もないので、ちゃんと食べなさい、お風呂にも入りなさいと指示をしますが、もうこれは一人の人間として、やはり被災者を差し置いて、温食をいただいたり、お風呂に入ったりすることはできないのですね。

そこで、この写真のように、山形県にある駐屯地など、活動地域から離れた場所に、隊員がゆっくりできるスペースを設けて、たとえば1週間活動したら、1日か2日、こういう場所で、ベッドの上でゆっくり寝かせる。お風呂にも入らせるし、温かい御飯も食べさせる。「戦力回復」という言葉を使いますが、そのように対応しておりました。生活も落ち着いた今、改めてこの写真を見ますと、体育館にベッドが並んでいるだけで、あまりゆっくりできないような気もするのですが、屋根もあるし、床もあるところにベッドを置いて、ゆっくり寝られる、あの当時はそれだけでも幸せでした。

それからメンタルヘルスです。やはり、活動中に、ご遺体を扱うことが多かったものですから、どうしても気持ちが塞いだり、元気がなくなってしまう隊員もいました。そ

こで、カウンセラーなどの巡回指導チームが部隊をまわってアドバイスをしたり、各駐屯地にはだいたい1人、臨床心理士がいるのですが、その人たちからアドバイスをもらったり、少しでも隊員が心が平静を保てるように対応しておりました。

このメンタルヘルスですが、新聞などでは、ご遺体を扱うことが多かったから、隊員は気持ちが塞いでしまう、元気がなくなってしまう、つまり、ご遺体を扱っていることが原因だと理解されていますが、人間の心というのは非常に複雑で、必ずしそれだけが原因ではありません。実際には逆の場合もあります。例えば、隊員によっては、ご遺体が見つからないからということで、元気をなくしてしまうのです。ご遺体があるからではなくて、ご遺体が見つからない、要するに、ご家族の期待に応えられない。だから自分は駄目だというふうに思って、元気をなくしてしまう隊員もいるのです。

それから、これは私自身がそうですが、司令部勤務者とか、部隊でも連隊長などの指揮官クラスは、もう少し自分はいろんな事ができたのではないかと、あの時もっとこういうことをすれば良かったのではないかと考えてしまうのです。これは活動中に限らず、活動が終わった後でも、今でもふとそう思うときがあります。

発災当初は、とにかく全てが足りません。隊員の数も足りないし、車両もない。救援物資もありません。本当だったら、被災者のために、いろんな事を全部してあげたいけれども、それができない。人命を救助するといえば、生活支援は後回しになってしまう。逆に、生活支援をやるといえば、ご遺体の収容が遅れてしまいます。要するに、何かをすると何かを失う。必ずみんなを満足させることはできないのです。私自身も、あの時、自分はこういうふうに判断したけれども、本当にこれで良かったのかと思う時があります。当時は情報もなかったし資源もなかった。その中で、自分なりに精一杯の判断をし、当時の君塚指揮官に「指揮官、こういう事だと思えます。いかがでしょうか」「こうするといいと思います」と指導を仰いでいました。でも、今になって考えると、もうちょっとしっかり情報が取れたのではないかと、もうちょっといろんな事ができたのではないかと、やはり考えてしまいます。限られた資源と時間の中で、あの時点では、自分としては最善を尽くしたじゃないか、あれ以上の判断はなかったじゃないかと思ってるし、自分に対して、そう言い聞かせてもいるのですが、やはり人命に関わる問題だけに、簡単には気持ちの整理が付きません。

それからもう1つ、現場では、どうしてもご家族の方に感情移入をしてしまいます。臨床心理士の先生からは、「現場で感情移入してはいけません。特に、ご家族には感情移入してはいけません。気持ちがもたなくなりますよ」と言われているのですが、いざ現場に出ると、それが本当に難しい。

私も被災地で体験しましたが、ご遺体を発見した時に、周りで捜索状況を見守っておられたご家族の方がどういう表情をなされているかということ、最初はほっとした表情をなさいます。それまで行方不明だったわけですが、それがやっと見つかったということ

で、ほっとした表情をされます。ただ、同時にがっかりした表情もされるのです。それまでは、助かってはいないだろうと思いつつも、でも、もしかしたら、ほんのわずかな確率でも、どこかで生きていてくれるかもしれない、また、そうあって欲しいと思っていたのだと思います。しかし、ご遺体になって見つかったということで、やはり亡くなっていたのかと落胆されるわけです。そのほっとした気持ちとがっかりした気持ちの両方が表情に出てくるのです。そういうことを考えながら、ご家族の表情を見ていますと、こちらにも非常に胸が締め付けられるような気持ちになります。隊員はどうかと思いつつ周りをみると、水につかりながら作業をしているのですが、やはり同じように涙を流しながら作業をしています。感情移入してはいけないと言うのですが、現場にいますと、そう簡単ではありません。

ただ1つ言えるのは、感情移入してしまうことは、決して失敗ではないということです。今回、各種の世論調査を見ますと、自衛隊は被災者のためによくがんばってくれたと、国民から高く評価していただいているようです。その評価の中には、例えば、人形やぬいぐるみまで、自衛隊がちゃんと大事に扱ってくれた、ということ意外な思いも含まれているようです。今回の震災では、自衛隊の仕事は人命救助や行方不明者の捜索です。特に人形やぬいぐるみを探すことまで想定されているわけではありません。しかしながら、ご家族の気持ちになってみた時に、「ひょっとして、このお母さんのお子さんは亡くなっているかもしれない。津波で周囲のものは全て流されてしまっている。そうすると、今見つけたこの人形が、このお母さんにとっては唯一の形見になるかもしれない」そう思うと、冷たい水であっても、一生懸命に洗って、きれいにして渡してあげようと思うわけです。

現場にいますと、どうしても感情移入してしまう。感情移入してしまうから、臨床心理士の先生が言うように気持ちが痛んでしまいます。しかし、同時に、各隊員がご家族に感情移入するから、ご家族と同じ気持ちで現場にいるから、そのご家族の思いに寄り添って、ご家族のためにできることは何でもしようとして柔軟に対応できたのだと思います。

私自身も子供が2人います。先ほど、写真がありました大川小学校で行方不明者の捜索をしているときに、あるお父さんから声をかけられました。娘さんがちょうど中学校に入る時で、「制服も作ったのに、娘に着せてあげられなかった。自衛隊には本当に迷惑かけて申し訳ないが、遺体があればこの制服を着せてあげられるから、とにかく早く娘の遺体を見つけてほしい。」とお願いされました。私の娘もちょうど中学校に入る時でしたので、お父さんの気持ちが痛いほどよく分かりました。これを仕事だからと割り切ることはとてもできませんでした。今、こうやって思い出しても、目がうるうるしてしまいます。

また、こういう例を挙げるのは慎んだ方がよいのかもしれませんが、お母さんのご遺体の横で、ペットボトルやビニール袋がグルグル巻きになっていたお子さんのご遺体が

強く印象に残っています。この子はどうしたのだろうかと思って警察の人に聞いたところ、おそらくお母さんが、この子だけはなんとか生きてほしい、生かしたいと考えて、藁にもすがる思いで、ペットボトルなどを浮き輪代わりに使ったんじゃないでしょうかとのことでした。そういう話を聞いて、お子さんのご遺体の横にいるこのお母さんのご無念を考えると、穏やかな気持ちではいられなくなってしまいます。

災害活動は終わりましたが、気持ちの面では、むしろ活動中よりも気持ちを病んでしまったり、元気がなくなってしまう。こういう隊員が出てきていますので、活動中だけではなく、今後も引き続き、常に、隊員の気持ちに変化はないかということをチェックして、少しでも隊員が元気でいられるように配慮したいと考えています。なお、この問題は部隊レベルだけでなく、省全体として、同じ認識を共有して、対応を図っているところです。

次の資料をお願いします。最後になりますが、今回、こういう形でいっぱい感謝のお手紙をいただきました。大川小学校の生徒からもお手紙をいただきました。私も現場に毎日出ていましたが、その理由のひとつは、隊員が困っていることはないか、何か足りないものはないかを聞くためです。そして、そういうものがあればいち早く手当とする。そのために現場に行っていたのですが、東北の隊員は、とても我慢強いんですね。何か困っていることはないですか、足りないものはないですかと聞いても、いや大丈夫です、満足ですと言うのです。当初は、ゴム長の調達が間に合わず、隊員は迷彩服で水の中に浸かって捜索していますので、冷たくて仕方ないと思うのです。それでも、いや大丈夫ですと答えます。これほど我慢強く、表情ひとつ変えずに作業していた隊員たちですが、それが、いただいた感謝の手紙を見て、おいおい涙を流して泣き出すのです。本当に喜んでこういう手紙を見ておりました。

隊員たちは、普段も一生懸命に訓練をしていますが、山の中の演習場などで訓練していますので、一般の方に見ていただく機会はなかなかありません。今回は、大変過酷な活動ではありましたが、皆さんから、このようにお手紙もいただき、非常に励みになったと思います。

10万人の隊員をここに連れてくるわけにはいきませんので、今日は私は、この隊員たちの代表という気持ちでこちらへまいりました。隊員たちは、こうやって皆様に手紙をいただいたり、また、被災地で手を振っていただいたり、敬礼していただいたりなど、非常に親切にしてくれました。本当につらい活動だったのですが、その中で、皆様からの激励が、本当に我々の励みになったと今思っております。今日は、隊員みんながお礼を言うことができませんので、私、最後に、隊員に代わりまして、お礼を言わせていただきまして、講演を終わりにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

【 その2 「東日本大震災対処の概要」 】

(成田将補)

紹介いただきました、第9師団の副師団長の成田です。

第9師団といいますのが、今、須藤政策補佐官は、東北方面隊ということで、東北6県を担当しているんですけども、我々第9師団というのが北東北、この青森県、秋田県、岩手県、この3県の災害の対応を含めまして、防衛警備、この担当をしているのが第9師団です。その副指揮官をやっております。

また、併せまして、この浪館に青森駐屯地がありますけれども、その駐屯地司令と兼務してやっております。

ということで、我々第9師団、今回の災害で、岩手県を主に担当しましたので、そのところの、先ほど全般の説明がありましたので、では、我々ここにいる、青森にいる自衛隊、秋田、岩手にいる自衛隊が、こういう災害の時に、どう対応していくんだろかというのを見ていただくために、今回の活動を時間を追って、若干、説明いたしまして、後ほど、話すだけではなく、我々師団で、この活動を15分くらいのビデオにまとめましたので、それを見ていただこうと思っております。

それでは、まず最初に、発災直後、我々の部隊がどう動いたかというところでありませう。

発災は、皆さんご存じのとおり、3月11日、14時46分でした。

14時46分、マグニチュード9で、そのとき、我々はたまたま平日でしたので、隊員は、休んでる隊員は少なく、ほとんど駐屯地にいるんですけども、4分後には全隊員、休んでいる隊員も出てこいと。左上の方にちょっと書いてありますけれども、50分には全隊員駐屯地、主要な部隊に帰ってこいと。そのすぐ後には、岩手県の知事の方から、災害派遣の要請が入っております。

画面の左下の方に、こちらになるんですけども、震災が14時46分でしたけれども、その15分後には、八戸に所在しております飛行部隊、航空偵察で沿岸地域をすぐ偵察に入りました。

また、地上偵察、車で沿岸地域をどうなってるかを調べる部隊が、30分後にはもう出動しております。

それで、我々は北東北3県と申しましたけれども、普段のところは岩手に駐屯している、岩手に所在している部隊がありますので、この部隊に何かあったら最初に岩手の状況を見ろというふうに命じておりますので、その部隊が15時30分、約40分後には出ていっております。

それで、1時間40分後には、岩手のほとんどの部隊が休んでいる隊員も集めて、出てきた隊員から逐次、岩手県の沿岸部、これに対応しております。

これだけ地震が起きてから15分後、30分後と出ておりますけれども、我々普段、呼集といって集める体制というのも、例えば、地震が起きると、震度6以上が起きたら黙ってでも全員帰ってこいと、震度4くらいですと、どんな地震が起きているのかということで、情報収集する要員だけは、休みであってもすぐ出てこいと、こういうふうな非常勤務といいますか、非常呼集体制というものを我々はとっております。

また、こういうような初動対処部隊が、1時間後には出ておりますけれども、この北東北、各秋田、岩手、弘前、八戸、青森と、我々第9師団が駐屯しておりますが、各々の駐屯地で、何かあれば1時間以内に命令を受けて、1時間以内に何かあるか、出られるようにということで、数十人単位の者を常に待機させております。

このような待機の態勢があるから、このように対応できた。これも今まで、よく阪神淡路大震災と比較されるんですけども、そのようなところから教訓を得て、どのような待機態勢、また、自治体さん、後ほど連携のことも話しますが、県、市町村と、どう連携するのかというようなことを得て、今の態勢を作って、待機しているところがあります。

また、今ここに部隊の符号で担当しているところを出しておりますけれども、このようなところも、普段から、ここの宮城、この三陸地震というのは、99%起こるといふようなところも言われておりましたので、我々、自衛隊自身も、この東北方面全部もそうですけれども、我々第9師団も、ここで大きな地震が起こったら、どの部隊をどこに出そうかというものを、普段から計画して持っております。ですから、何もないところから出すのではなく、このように何か起こったら、ここに出すぞ、という計画を持って、黙っててもこの計画に従ってとりあえず動くと、後は状況が分かり次第、それを修正していくと。そのような準備があり、また、地震が起こるといふところで、普段から毎年のように、地方自治体さん、また、地域の方と、この地域を使って訓練しておりましたので、計画があり、訓練してあってこそ、これだけの時間、また、当初対応ができたというような状況になっております。

これが最初の、初日の状況であります。

一方で、一番下の方に書いておりますけれども、八戸の方にも被害がありましたので、全力で岩手に行くのではなく、八戸に駐屯している部隊を残しまして、八戸の災害派遣の対応、青森県の対応につきましても、我々青森・秋田・岩手を担当していますので、青森にも対応しつつ、ほとんどの主力は、こちらに行く準備をしたというところであります。

これが震災が起こった夜から当初3日間くらいの対応の状況であります。

我々3個県に駐屯しているこの師団、このほとんどの部隊を、弘前、青森の部隊、八戸の部隊、秋田の部隊から、こちら青森に駐屯しております第5普通科連隊という部隊が陸前高田に、弘前駐屯しております第39普通科連隊という部隊が大船渡に、秋田に

駐屯しております第21普通科連隊という部隊が釜石ということで、この地域の部隊も、計画で何か大きな地震があったら、この地域に行くと、このようなところを計画しておりましたので、黙ってこういうふうに入っていきます。

当初、全部岩手の部隊で全般を見ていましたけれども、こちらの部隊が入って来たら、岩手の部隊は宮古と久慈、こちらの北部の方を担当しろということで分担を決めております。

11日の夜から12日の早朝には、もう既に入って来ておりますので、12日から人命救助を本格的に早朝から開始しております。

また、私、第9師団の司令部の副師団長をやっておりますけれども、師団司令部というのは、普段はこの青森におります。小さな災害という言い方は失礼なんですけれども、一部の部隊が出る程度では、我々この青森の方で状況を掌握するんですが、今回みたいに師団全力が出るということで、師団の指揮所司令部機能を、全てこの青森から岩手の県庁に移して、盛岡市に移しました。

13日の夜24時には、全部師団の指揮所、情報を取り、部隊を動かす、その機能を県庁に推進しております。

県庁の最上階の会議室をお借りしまして、師団長以下全てが、ここの岩手県庁に移っていたという状況です。

また、ここに遠野の方に、後方支援をする部隊を置いているんですけども、ちょうどこの部隊という前線に出た部隊の者が、我々の食事を運んだりするような整備する補給整備を担当する部隊は、ちょっと後方に置きましたのは、どの地域においても、ちょうど扇の要になるということで遠野に置く。これも計画どおりなんですけれども、普段から訓練してますけれども、ちょうどエピソードって言いますか、地域の方との関係になるんですけども、普段から自衛隊は、この大きな地震があったら第9師団、青森の司令部部隊は、こちらに後方支援所を作るところで、遠野の運動公園に作ったんですけども、きっとこれだけの地震だから、自衛隊は来るはずだということで、我々の部隊がここに入ったときには、遠野の市の方が懐中電灯とローソクを持って、我々がここに入りやすいように待って下さってました。

そのように普段から計画があり、訓練しておけば、我々も期待されているところに、このとおりの成果が出せるようになりますし、地域の方と連携できるというようなところで、非常に我々も明かりの無いところに入って行くのに、懐中電灯で照らしていただいたというようなところで、非常にスムーズに、こちらに後方の支援所を作ることができたというようなところもあります。

最終的に、全部の部隊がこのように入って来たんですけども、我々第9師団、計画では第9師団で、ここを全部受け持つ予定でしたけれども、今回の地震っていうのは、我々が計画で思っていたより規模も大きく、また、地域も大きいということで、これ

では我々第9師団だけでは足りないというところもありまして、北部方面隊という北海道の部隊、この”2”と書いております旭川に駐屯しております第2師団、司令部、こちらが海を渡って、海峡を渡って入って来まして、この北海道の部隊に、宮古以北の沿岸部の北部、こちらを担当してもらって、我々第9師団はこの山田町（やまだまち）以南、こちらに部隊を全て展開し直して、こちらの方で活動しております。

先ほどありましたように、岩手県庁に我々の指揮所を設けたわけですがけれども、今回、九州から北海道までの部隊、全部師団の大きな部隊が来ましたけれども、師団レベルで指揮所を県庁に所在したというか、県庁に置いたというのは、我々の師団だけなんですけれども、やはりここは県と我々が一緒になってできたということで、当初の計画では、我々は岩手の駐屯地か、岩手の演習場から指揮をしようと思ったんですけれども、県の方が一緒にやった方が一緒にできますと、県庁の会議室を提供できますというところで、こちらに展開しました。

そのおかげで、毎日県知事と顔を合わせ、県の会議に出て、自衛隊はこういうことができます、県からはどんなことが必要かというのを、スムーズに調整できたと。やはりこういう大きな時は、我々自衛隊だけではできませんので、自治体といかに連携するかというところで、ここは非常にうまくいった例であります。

先ほど、時間を追っての説明だったんですけど、これは我々の行動で、では、どのように時期がずれていったのかというので、さっきの説明と若干ダブリますけれども、やはり最初の1週間、主として人命救助、もう人力で人命救助をしていくと、行方不明捜索をしていくというのが、最初の1週間でした。

それから、第2期と称しますけれども、1週間後からは機械力を使って、行方不明者の捜索でも機械で瓦礫を持ち上げて、その下に行方不明の方はいらっしゃらないかというのを探しつつ、また、並行的に生活支援ということで、給水・給食・入浴とか、物資輸送をやり始めた。やはり、当初の1週間は、重点は人命救助、その後人命救助しつつ、生活支援をやっていくと。1ヶ月半くらい経ちますと、もうほとんど行方不明者の方も見つかると、数も減ってくると、生活支援から復旧ということで、公共施設の瓦礫を除去したりというような形で動いております。

それで7月以降、我々が下がって、撤収しても避難されている方々が困らないようにというところで、我々が出た後、入浴支援は自治体がやってくれますか、例えば、食事は仕出し屋さんがやってくれますか、というのを町、市、それぞれに確認しつつ、では釜石市は、後は一般の土建業者さんが瓦礫、また仕出し屋さんが食事、弁当屋さんが食事できると、物資輸送も宅配便さんができるというのを確認して、釜石はOKだから釜石は去る、撤収しますということで、逐次7月の10日以降撤収しまして、7月の26日まで展開して、岩手県から撤収して来たというような状況であります。

これが先ほど、全般の陸上自衛隊、陸・海・空の、JTF全般の活動実績でありまし

たけれども、我々第9師団で活動した実績はこのようなところであります。

別に数字というのは、結果として残ることで、これがどうというあれはないのですけれど、今回災害派遣で、このくらいな救助をして、また、生活支援もこのくらいやったということです。

後ほど、ビデオに出てきますけれども、特徴的なこととして、「お話し隊」の傾聴支援ということで、先ほど女性には女性のニーズしか聞けないというようなところもあったり、避難所も長くなると、ストレスも溜まってくるということで、我々自衛官の中にカウンセラーの資格を持つて人間、女性を主体にこのような組織を編成しまして、各避難所に回って、困っていることありませんかとか、ご不満とか、そういうのを聞いて、この傾聴支援をしていたというようなところもあります。

また、ふるさと確認とかと言いまして、やっぱり復旧の状況、この町がどうなっているかというのを、自治体の方に見ていただくということで、上空から見ていただいて、復興の方向性を見ていただく、また、安心していただくというような活動もしております。

最大のやはり避難所というものが、あるときに当初自治体も、それだけ人がいませんですから、我々自衛隊が人海戦術で各避難所を回って、最初の1週間で、この地域に何カ所避難所があつて、そこに何名いらっしゃるんだ、その避難所からは何がほしい、いるのかというのを見まして、約400箇所、4万7千名の実情を把握、1週間で把握して、それ以降は要望に応えるように、我々の部隊を運用したというような状況であります。

それでは、我々の活動状況をビデオに大体15分くらいでまとめておりますので、それを見ていただければと思います。

若干必要なところは、補足させていただきます。

【ビデオ上映】

以上が、我々第9師団でまとめた活動のビデオなんですけれども、ここにありましたように我々できることは我々の隊員、また、持っている装備、できることは何でもやると、「全てを被災者のために」という合い言葉でやっておりました。

ただ、本当に最後のビデオにもあつたんですけれども、こういう子供達、また、もちろん大人の方もですけれども、我々が行き帰り、また、いろんなところでこういう温かい感謝の言葉とかそういうのをいただいて、これがやはり隊員の心の支えになっていたと。たまたま、この写真というのは岩手日報さんに幼稚園、保育園の子供達が自衛隊の飛行機が通るたびに、こういうのを準備して待っているというのが新聞に出てまして、ではその地域を飛ぶときに、子供達のそういう気持ちを無駄にしちゃいけないという

ころで、その地域の上空を飛ぶときに、「この日にこちらの方向飛びますよ」というふうに言って、子供達が手を振ってくれたのを上空から撮ってパネルにして、ここの保育園に渡したという写真であります。

こういう写真を我々の指揮所に飾って、この気持ちで日々次の日も頑張るぞというようなところであります。

我々このように普段から訓練してること、連携してることで、やっていきますけれども、やはり何も準備してない、訓練してないとできませんので、日頃から、特にここ青森ですと青森駐屯地で、自衛隊が日々訓練してるのを、我々もちろん何かあれば、防衛任務のためにやりますけれども、その訓練の成果が、平素においては、このような時にも使えるようにというふうに、日々訓練しておりますので、いろいろ青森駐屯地、この市で我々の隊員を見ると思いますが、普段こういう格好では無くて迷彩服でやっておりますが、何かありましたら、我々もこの青森、北東北3県に展開している以上、まず第一に、こちらの何かお役に立てることは、というのでおりますので、引き続き皆様のご支援をいただければと思います。

どうもありがとうございます。

(司会)

ありがとうございました。

皆様から、本日の講義内容について、ご質問のある方は挙手をしていただき、名前及び職業等はいりませんので、質問内容のみお話いただき、その質問内容に対し、説明者から回答させていただきます。

皆様の中には、質問に対する回答に対し、更にお聞きになりたいことなどがあるかもしれませんが、時間の関係上、本日はいただきました質問に対してのみの回答とさせていただきます。

それでは、ご質問のある方は挙手をお願いします。

【 質疑対応 】

【質問1】 男性

先ほど、ビデオで紹介がありましたメンタルヘルスについて、紹介がございましたけれども、メンタルヘルスをやる専門の方というのは、自衛隊の方なんでしょうか。

それとメンタルヘルスについて、災害派遣で、自衛隊いろいろ今までもやって来られておりますけれども、メンタルヘルスをさっき写真に出ました自衛隊の方に、カウンセラーの方が写っていたと思うんですけども、そういうカウンセラーを隊員の方に紹介してメンタルヘルスをやったのは、今回が初めてなんでしょうか。

その点について質問したいと思います。

【回答1】 回答者：第9師団副師団長

隊員にまずいるかどうか、我々制服を着ている隊員にも、職業カウンセラー、こういう一般の資格とかですけど、一般の研修に行かせまして、取ってる、持ってる者もおります。

また、各自衛隊の駐屯地には、制服ではない事務官といいますか、背広を着た臨床心理士が各駐屯地に、昔はそれほどいなかったのですが、このようなこともありまして、各駐屯地に採用していただいております、こういう災害派遣だけではなく、国際貢献の任務とか、そのようなもの、日頃のストレスですとか、そういうのを含めていつでも駐屯地で相談できるような体制をとっているということで、隊員の中にいますし、専門の制服ではない、自衛官ではない臨床心理士もおります。

過去に、このようなものがあつたかといいますと、災害派遣そのもので直接やったことは我々師団の中では、これほど大きな展開で災害派遣も出たこともありませんので、ありません。

ただ、各駐屯地におりますので、海外での経験、また、何か日頃の勤務のストレス、そのような点で、駐屯地におります臨床心理士に相談に行ったり、日頃の業務から来るものというものは、日頃からそういう相談はやっております。ただ、災害派遣の活動において、これだけの活動をしたというのは、最近ありませんので、初めてと、我々の師団においては、初めてと言っていると思います。

【質問2】 男性

すいません。質問ではなくて、感謝の言葉なんですが。

実は今日、盛岡から来ました。

須藤さんの、実は、本を読みまして、なかなか自衛隊の方が、現役の自衛隊の方が、何て言うんですか、こういう生々しい話とか、家族の話とか書かれることがあまりない、退官された方はよくあるんですけど、というのもあって、是非とも話を聞きたくて盛岡から来ました。

特に子供さんとの関連とか書かれたりして、実は私も岩手県、県庁の方に2年ばかりいたんですけども、一般職の公務員やってるんですけども、私も1週間ほど家に帰らずに仕事をしたんですけど、なかなか自分の父親の仕事ってのを分かってもらえないというのが、須藤さんのところにも書いてあったりして、共感を持ってました。

あと、岩手県民として、ここに居るのは青森市民だけだと思うんですけど、岩手県民として師団の副師団長さんに御礼を申し上げたいんですが。

まず、続々と北の方から高速道をつたって入って来るんです。部隊を見て私も盛岡市民として非常に勇気づけられました。

本当に、今回の被災地支援はありがとうございました。

【回答2】 回答者：須藤政策補佐官

どうもありがとうございました。

本を出しまして、少し目立ち過ぎではないかというふうに言われることもあるのですが、今のお話を聞きまして、大変励みになりました。引き続き、一生懸命精進したいと思います。ありがとうございます。

【質問3】 男性

自衛隊という組織ができてから、今回の災害派遣活動でのおそらく最大規模だと思うんですけども、その中で、また、東南海、これからまた、三陸沖とか、両方また大きな災害が発生するおそれもあるんですが、それに向けて、自衛隊さんのいろいろな組織があると思うんですが、今回も恐らく課題、主要な課題等整理をされて、今後それについて、どういうふうに対応していくのかという、いろいろなのを検討されていると思うんですが、そのあたり、主要なところをあればちょっと話していただきたいと思います。

【回答3】 回答者：第9師団副師団長

まず、現場レベルといいますか、師団、部隊レベルですと、やはりこれだけ長期にわたったというところで、我々も師団6千人くらいおりますけれども、6千人がフルに3ヶ月活動しますと、長期の勤務の時に戦力回復は、須藤補佐官の方からありましたけれども、いかに持久力を、持続力を持ってこういう活動ができるかと。その体制です。

例えば、隊員にも家族があります。

また、どこで休養させる、戦力回復にはどんなものがあるかです。

そういうものを、また我々の物資も当初不足しましたから、自分達の物資も、どう蓄積して置いとかなきゃいけないんじゃないかとか、そういうようなことも日々教訓を持って、終わったっていいですか、活動しつつ、今回できなかったこと、さらに良くすることは日々考えておりますけれども、1つ大きく言えば、持続性といいますか、これを

どう取るかと。

普段は1週間くらいしたら動きますけれども、このあたりの点というのは、良くやらないといけないと思ってます。

まさに、これも我々先ほど言いましたとおり、阪神淡路大震災の教訓で、今回これだけ動けたところもあります。今回できなかったこと、そういうところも含めて、今まさに検討し、例えば、物でしたら補正予算とかで、今後買っていただくなり、装備する物、また、訓練のやり方。もう1つ言えば、今自治体さんも災害派遣といいますか、災害の対応計画を作り直されたりしてますから、その時から良く連携して、我々の持っている能力をいかに自治体さんとコラボといいますか、一緒になってできるかというので、計画段階からいろんな我々も参画させていただいてやるのが、もっと何かあった時に、我々の能力を最大限に使ってもらおうといいますか、活動できるという点かと。すいません、ざっくばらんなところ、持続性というのと、自治体との更なる連携という点というのは、今一度、我々としてもやっていかななくてはいけないと、現場レベルでは考えております。

【回答3】回答者：須藤政策補佐官

今回のような大きな震災に対処する場合、やはり自衛隊だけでは対応できない面も多々ありますので、中央のレベルでも、関係省庁などと各種の計画の見直しなどを進めていると聞いています。また、私のいます総監部でも、各省庁の出先機関や自治体と、打ち合わせを行い、同じように各種の計画などの見直し、点検をしています。

(司会)

それでは、お時間となりましたので、ご質問に対する回答を終了させていただきます。

【 閉会の辞 】

(司会)

長時間にわたりまして、ご静聴ありがとうございました。

このセミナーを通じまして、皆様が防衛省・自衛隊の活動につきまして、より一層のご理解を深めていただくことができたならば、幸いです。

今後とも、防衛省・自衛隊に対するご理解・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

なお、ご入場の際、お配りいたしましたアンケート用紙につきましては、お帰りの際、アンケート回収箱に投函していただきますようお願いいたします。

アンケートでいただきました皆様のご意見等につきましては、持ち帰りまして、私どもが、今後の業務を実施するにあたっての参考とさせていただきたいと思えます。

最後に、本日の説明内容及び質問の質疑応答の内容につきましては、当局のホームページ等に掲載して、公表することを予定していますので、ご了承願います。

これを持ちまして、本日の防衛問題セミナーを閉会させていただきます。

本日は、誠にありがとうございました。